2018年3月26日（月）朝日新聞

東日本大震災7年

卒業制作に防災啓発冊子

「若い女性」ターゲット 服装や必需品 イラストで紹介

川崎医療福祉大 中務さん

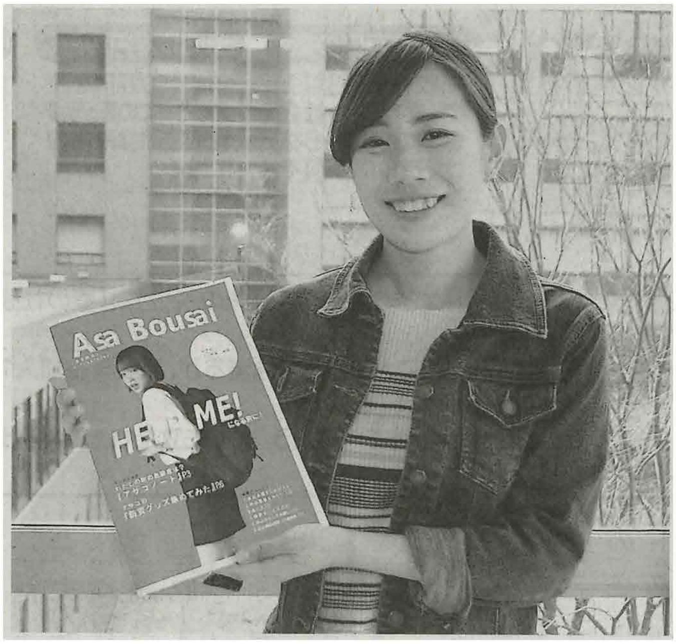
赤い表紙には、若い女性が大きなリュックを背負う写真に白い文字で大きく「HELP ME!」。一見、女性向け雑誌のようだが、実は防災の啓発冊子。川崎医療福祉大（倉敷市）で医療デザインを学ぶ学生が卒業制作で作った。かわいい体裁の1冊の根底には、幼い頃の火災経験に基づく訴えがある。

A4サイズの全14ページ。表紙を開くと、見開きで大きく「油断してない？」。災害で崩れた建物の写真を背景に、読む人の防災意識を問いかけてくる。

女子大生のキャラクターが防災を学ぶ自作漫画が描かれ、避難時にふさわしい服装や女性ならではの必需品などがイラストで表されている。

医療福祉デザイン学科4年の中務夢香さん(22)が作った。生まれも育ちも現在の浅口市鴨方町。小学校低学年の頃に家が火事になり、祖父を亡くした。出火当時、中務さんは外出していたが、帰宅して目の当たりにした、焼けて黒くなった家に大きなショックを受けたという。

この経験から、防災の啓発冊子を卒業制作にすることにした。作製に先立ち、浅口市の防災訓練に参加した。そこで若い人の参加率が低いことを知り、ターゲットを「若い女性」に絞った。「いざというときに必要なものが多く、日頃の備えがいっそう大事」と考えたからだ。



自作の防災パンフレットを手にする中務夢香さん＝倉敷市松島

浅口市で起こる可能性がある災害の種類が描かれたページ

自分で準備できる

まず大学生が初めて防災セットを買うと想定し、市販品の価格を調べた。するとどれも1万円以上と高額で「これ買うんだったら服買うわー！」と女子の本音も漫画に記した。

そこで、自分で買える水や缶詰など非常食のほか、生理用品やブラカップ付きキャミソールなど、一般の防災マニュアルにはあまり載っていない女性特有の必需品を挙げ、折りたためるスプーンやフォーク、コップなど100円均一で買える便利品も紹介した。

災害身近に感じて

少しでも災害を身近に感じてほしいと、鴨方、金光、寄島の3町で起こる可能性がある災害も描いた。中務さんは「海から離れた場所でも、川や用水路を伝って水が押し寄せることがあると分かった」と話す。

卒業後は、倉敷市で一人暮らしをしながら飲食店で働く。新天地でも地域の防災訓練に参加していく。「啓発冊子をスーパーなど手に取りやすい場所に置いて欲しい。防災訓練の場にカフェを設けるなど、若い人が関心を持ち、参加しやすい工夫も考えたいです」

（小川奈々）